

## Position Statement for SS2009 WG1

岸田孝一 (SRA-KTL)

Christiane Floyd が20年ほど前に指摘したプロダクト指向からプロセス指向へのパラダイム・シフト[1]は、いいかえれば、開発者指向からユーザ指向へという視点の変化だとも考えられる。「人間中心のソフトウェア開発」というキーワードを聞いてすぐに想起されるのは、たとえば ISO13407「インタラクティブシステムの人間中心設計過程(Human-Centered Design Processes for Interactive Systems)」であるが、この国際規格も、やはり旧来のプロダクト指向パラダイムに毒されていて、いわゆる「設計と製造の分離」という視点を脱し切れていないように思われる。

おそらく、われわれにとって重要なのは、SS1982の基調講演者 M.M.Lehman のいう E型ソフトウェア進化の無限ループ[2]を前提として、ソフトウェア開発という活動を、開発者およびユーザを含む人間集団による「コミュニケーション、相互学習および協同作業」としてとらえることであろう。それは当然ながら、さまざまなかたちのフィードバックを含む永久ループを構成する。

わたしが個人的に関心を抱いているのは、その活動を支援する環境 (Process-Centered Software Development Environment) である。そこには次の3種類のタイプがある[3]:

A. Coordination Support

B. Cooperation Support

C. Co-Construction Support

タイプ A は、CMM その他のプロジェクト・マネジメント手法を支援する環境であって、旧来のプロダクト指向パラダイムに準拠している。タイプ B は、プロジェクト・データベースを中心としてさまざまなコミュニケーション支援を行う CSCW型の環境だが、支援対象はやはり開発者グループに限られていて、ユーザを含めたコミュニティまでは視野に入っていない。

本当の意味で「人間中心」を目指すのであれば、開発者だけでなくユーザをも含めて、ダイナミックに変化するシステムへのニーズや要件に対応しながらフレキシブルに開発&利用のプロセスを変化させて行くためのタイプ C の環境が必要であろう。そうした環境を実現するための技術はすでに整っているのではないだろうか。今回の WG 討論では、そのあたりのことを議論してみたい。

[1] Christiane Floyd, "Outline of Paradigm Change in Software Engineering", SEN Vol.13, NO.2, April 1988, p.25-38.

<http://delivery.acm.org/10.1145/50000/43851/p25-floyd.pdf?key1=43851&key2=9214954421&coll=GUIDE&dl=GUIDE&CFID=38704968&CFTOKEN=97503505>

[2] M M Lehman and J F Ramil, "Software Evolution", STRL Annual Distinguished Lecture, De Montfort Univ., Leicester, 20 Dec. 2001.

<http://www.doc.ic.ac.uk/~mml/feast2/papers/pdf/690c.pdf>

[3] P. Barthelmeß and K.M. Anderson, "A View of Software Development Environments Based on Activity Theory", CSCW Journal, Vol.11, No.1-2, March 2002.

<http://www.springerlink.com/content/u3c3jn3pr2rtax5qh/?p=0785629a6c31465abe1d97195f66e3ac&pi=1>